

落合良行「青年期における孤独感の構造」

本研究は、青年期における孤独感について研究したものであり、5章から成り立っている。

第1章では、孤独感に関する研究を展望し、従来の実証的研究の問題点を明らかにした。

1つの問題点として、従来の研究は、研究の基本である孤独感の定義が明示されていなかったことがあげられた。そこで、本研究では、実証的研究をするに先だって、孤独感に関する定義を明示し、「孤独感とは、自分はひとりであると感じること」とした。

また別の問題点として、従来の研究は、一面的で単発的であったことがあげられた。そこで、本研究では、孤独感について、多面的で組織的な研究を行うことを試みた。心理を研究する方法には、時間という視点を入れずに、今の心理状態を解明していく方法と、時間という視点を入れ時間の軸上での変化をみていく方法とがある。本研究では、前者の状態を解明していく方法を、構造的アプローチ、後者の時間の軸上での変化をとらえていく方法を発達のアプローチと名づけ、この2つの方向からのアプローチをとることにした。構造的アプローチとして、次の3つのアプローチを考えた。①孤独感とはなぜ生じるのかという孤独感の規定因からのアプローチ、②孤独感を類型化してとらえるアプローチ、③他の生活感情との関連から孤独感をとらえるアプローチである。本研究では、①の規定因や③の孤独感に関連した生活感情間の関連を、ただ並列的に列挙するのではなく、それらを整理し、次元としてまとめ、その次元が相互に結合している関係を明らかにしようとしている。その次元相互の関係を構造と名づけたため、これらの3つのアプローチを構造的アプローチと名づけた。また、発達のアプローチにも、2つのアプローチを考えた。①青年期内の発達の変化をとらえるアプローチ、②青年期を人生全体の中で相対的に位置づけ、その特徴をとらえるアプローチである。この構造的アプローチと発達のアプローチを組み合わせることによって、本研究は、孤独感を、多面的・組織的にとらえようとした。

第2章では、前述した孤独感の定義から出発して、孤独感の規定因に関する記述的・探索的研究をまず行った。それをもとにして、因子分析を用いて孤独感の構造を明らかにした。さらに、発達のアプローチを加え、この孤独感の規定因構造の青年期内の発達の変化を明らかにし、次に、人生の他の時期との比較を通して、青年期の規定因構造の特徴を明らかにした。

第3章では、孤独感を類型に分けてとらえ、孤独感の様相を明らかにすることにより、孤独感の理解を深める

ことを試みた。まず、第2章での規定因構造の解明結果にもとづいて、青年期における孤独感の類型化の方法について、実証的に検討した。その上で、孤独感の類型を判別するための尺度(LSO)を作成し、その妥当性と信頼性を検討した。次に、この尺度を用いて、孤独感の各類型の特徴を検討した。さらに、発達のアプローチを加え、類型からみた青年期の孤独感の発達の変化を検討した。

第4章では、いろいろの生活感情の関連構造からみた孤独感の特徴を、明らかにしようと試みた。まず、青年自身に、最近感じている感情名とその説明を記述してもらい、それによって青年期の代表的な生活感情を選定した。次に、クラスター分析や因子分析を用いて、孤独感を中心とした青年期の生活感情の関連構造を解明した。さらに、発達のアプローチを加え、生活感情の関連構造からみた孤独感の青年期内の発達の変化を明らかにした。また、一生の他の時期との比較を行って、青年期の孤独感に関する生活感情の関連構造からみた特徴を明らかにした。

第5章では、孤独感と人格形成との関係に関する研究をまとめた上で、本研究の結果を、人格形成との関連で、発展的に考察した。そして最後に、本研究の問題点と今後の展望について述べた。

本研究では、「孤独感とは、自分はひとりであると感じること」と、一応定義をして、研究を出発させた。そこで最後に、本研究の結果をもとにして、青年期の孤独感を次のように再定義した。

青年期の孤独感とは、「人と親密な関係をもとうとする志向性をもちながら、それが実現しないときに、人間同士の理解・共感は難しいと感じ、自分はひとりだと感じることであり、その感じの意味あいには、自分を含む人は、個性をもつ存在であることに気づくことによって変化する。」

筑波大学

教育学博士

櫻井茂男「内発的動機づけに関する自己評価的モデルの実証的研究」

論文の目的は、下図に示された「自己評価的動機づけ(Self Evaluative Motivation: 略してSEM)モデル」を実験室的研究と教育現場的研究により実証することであった。各章の概要は次の通りである。

第1章「序論」では、内発的動機づけの定義、研究史、今日的意義などが述べられた後、本研究の出発点となった認知的評価理論(Devi, 1975)の問題点が指摘さ